

連載 29 島津保次郎監督『家族会議』 虚実皮膜の人間模様

前回、山内光の出演作をあげたなかに『家族会議』（1936年）があった。原作は横光利一で、『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』に連載された。

が、山内光についていえば驚いたことに、『限りなき舗道』では準主役であった彼が、『家族会議』では店員Aとか店員Bとかいったランクに配役されている。床屋の客としてキャスティングされている滝沢修の放つ妙な存在感と比べてもあまりに薄い。伝え聞くところによると、山内光は二枚目の風貌とはうらはらに、声が悪く、トーキーになってから役付きが落ちていったのだという。そういえばミュージカル映画『雨に唄えば』には声が悪く歌えない大女優が出てきたが、映画のトーキー化による栄枯盛衰は活動弁士のみならず、日本の俳優の選別にも深く関わっていたようである。

『家族会議』では、代わって台頭してくるのが、主役に抜擢された佐分利信。東西の株屋の暗躍、仕手戦をさばく、渋い若旦那の役である。押し出しがよくて風格がある。そして声もいい。株の仕手戦で敵と味方に分かれた東京と大阪の株屋の、若い男女の恋模様がメロドラマとして展開される。東西の方言の対比、男言葉女言葉の対比など、それをトーキー映画がよくつかみとっているというだけではなく、その対比自体が、トーキーがつくりだした対比でもあり、対比として意識的に相違が強調されてもいる、そういう仕掛け



渡辺温（1902 - 1930）

だろう。楚々とした風情で品のいい関西弁を操る相手役の及川道子は、これが映画出演最後となった。

及川道子は、舞台出身で、『青い鳥』のチルチル役で若くして名をあげた。雑誌『新青年』の編集者であり作家でもあった渡辺温の恋人として伝説的な存在でもあり、いわばモダンボーイのアイドル的な女優だった。彼女が胸の病を得ていたところから結婚を反対された経緯がある。『家族会議』の二年後に病死した。ところが一方の渡辺温の方は、1930年早春、編集者として谷崎潤一郎を訪れた帰路、交通事故で不慮の死を遂げている。こんなことなら仲を引き裂くのではなかったと、薄命の若者たちの家族は悔やんだ。

様々な関係者の物語を抱えながら完成した『家族会議』は、『昭和十一年度優秀映画銓衡録』（『キネマ旬報』1937〔昭和12〕年2月11日）で、荒削りながら野心作として評価されている。

柄澤廣之は「新聞小説の映画で大人の鑑賞に耐へ得た最初の作品」といい、津村秀夫は「通俗映画としスケールの大きく線の太い事」を買い、山本幸太郎は「大作品でありながら此作品は、渋滞味がなかった。此点は島津保次郎の老練な扱ひが功を奏して居るのだと思ふ。台詞の統制も此作品が発表された頃としては、相当優れたものだつた」と褒めた。足立忠は「ガツチリ組んだ島津氏の大作をこなす、その「大柄」なところに、手もなく惚れ込んだ作品です」と称賛し、



『家族会議』VHS（松竹ビデオ事業部）のパッケージ

佐伯孝夫は「島津保次郎の野心を買ひたい」と論じ、杉山静夫は「珍しく整頓した大衆的メロドラマ。規模の大きさも記憶に値ひする」と記している。

メロドラマの名手、文芸作品に優れたといわれる島津保次郎監督の代表作のひとつである。